

題名	飛び込んで聴く
Title	The Audacity of Listening
著者名	キャロル・ギリガン
Author(s)	Carol Gilligan
言語	日本語
行事名	第 40 回(2025)京都賞記念講演
出版者	公益財団法人 稲盛財団
発行日	2026 年 10 月 15 日
開始ページ	1 ページ
終了ページ	9 ページ
URL	https://www.kyotoprize.org/wp-content/uploads/2026/10/2025_gilligan_jp.pdf

英語版テキストURL：https://www.kyotoprize.org/wp-content/uploads/2026/10/2025_gilligan_en.pdf

飛び込んで聴く

去る6月、私の仕事が京都賞に選ばれたという知らせをまだ実感しきれずにいたころ、私は2023年の拙著『人間の声で(In a Human Voice)』の日本語翻訳者たちから一通のメールを受け取りました。英語の「オーダシティ (audacity)」という語の私の用法が、メールの理由でした。翻訳者たちは、自分たちが正しく理解できているかどうかを知りたかったのです。これまで「オーダシティ」は日本語では「boldness (大胆さ)」や「daring (勇気)」と訳されてきましたが、私が愛のオーダシティや、ケアすることのオーダシティと書いているので、そうすると、翻訳者たちが言うには、「大胆さとはいっても、それは、無視されたり、見過ごされてきたものであり、家父長制、階層構造、そして、不正義に挑むゆえに、社会規範に照らしたときに横柄だと見なされてしまうたぐいの大胆さ」ということになり、また「勇気といっても、それは、新たな規範をつくり、関係性を変容させるために、現行の規範や現状の関係性を危険に晒すたぐいの勇気」ということになる、というわけです。

私は拙著『人間の声で』の最終章を、三人の映画監督の仕事に充てました。いずれもメインストリームで活動している男性映画監督であり、アーティストです。彼らは作品のなかで、階層構造に真っ向から飛び込み、関係性を変容させるような大胆さをもって、目を見張るほどのオーダシティを伴う行為を描き出しています。

映画監督の一人であるポール・シュレイダーは、これは自分がずっと撮りたかった映画なのだと言いました。ポール・トーマス・アンダーソンは「オーダシティ [ここではaudacious]」という語を用いて、鎧を着た自己を突破するために必要な行為の勇気を強調しました。そして、スパイク・リーも実質的に同じ思いを響かせていました。私はこれを、すでに『もうひとつの声で(In a Different Voice)』によってはじめていたドラマの第二幕だと見なしました。当初「女らしい声」として聞き取られ、私がケアの倫理と名づけたその異なる声は、いまやメインストリームにおいて、愛のオーダシティをともしなう行為[つまり、大胆さをもって飛び込む行為]として姿を現しはじめたのです。

そしていま、こうしてみなさんとともに京都にいる私は、この並外れた賞の栄誉にいまだ圧倒されながら、同時に、この賞が支えてきた人文学への希望を生かし続けねばならないという責任の重さにたじろいでいるわけですが、そのなかで私を突き動かしているのは、私の仕事がはじまった場所——いわば二度はじまった場所——にあったのは、当時ごく単純な行為だと思っていたこと、つまり、聴くという行為だったということです。最初は女性たちに、そして次に少女たちに耳を澄ませました。両方の場面で、そしてとりわけ少女たちの場合に、私は聴くことのオーダシティ[飛び込んで聴くこと]を発見しました。なぜなら、どちらの事例においても、私は聴くことによって物語を乱し、沈黙を破ってしまったからです。

私はケアの倫理について書きはじめ、それから、人間性を損なう喪失に対して抵抗するという健全な行いについて書きました。私はとりわけ少女たちとともにそれらを書いたのです。なぜなら、少女は常に存在し、まぎれもなくそこにいるからです。それに、私の仕事はとても注目を浴びたので、あたかも電気のコンセントに指が触れて感電したかのように感じていました。そうして、私は、ケアについて語らず、責任、関係性、相互依存という現実の出来事について語らないでいることが、いったいどのような利害のうえで生じているのか、そして、少女たちを沈黙させることで、誰が得をしているのか、と問わずにはおれなくなりました。私はもともと、妊娠を継続するか中断するかどうかの決断を前にした女性たちに耳を傾けることから研究をはじめ、気づけば民主主義と家父長制の緊張関係について書いていて、そして、オーダシティ、すなわち、自己を沈黙させよという圧力にたじろがないような愛とケアすることの大胆さについて書いていました。私の仕事はいつの間にか、声と沈黙をめぐるドラマのただ中にいました。

私が考えていることを知りたいんですか。それとも、私が本当に考えていることを知りたいんですか？ ひとりの女性が私にこうたずねたのは、私が研究をはじめたばかりのある日のことでした。私は

彼女に、心理学者が道徳的発達段階を測るために使う道徳的ジレンマへの応答を求めていましたが、彼女が私に語ったのは、彼女が道徳について本当に考えていることとは異なる仕方であることを学んできたということでした。

私は、語られたことだけでなく、覆い隠された声を聞くことを学びました。私が驚いたのは、人は往々にして、自分が考えていることから、本当に考えていることへ、実際に感じていることへ、もし正直に言うならこう言うのだが、という領域へと切り替わる瞬間にシグナルを出しているのを発見したことです。「本当は(really)」、「実は〔実際は〕(actually)」といった言葉、あるいは「正直に言うと(to be honest)」という言い回しに耳を澄ませることを学び、つぎのような問いを抱くようになりました。すなわち、人間の声、つまり、本当に考えたり感じたりしていることや、自分の経験に根ざして直に知っていることを語る声、そして、もし正直であろうとするなら語られる声は、覆い隠されてしまうのだろうかという問いです。

私は、ある隠された声を聞きたければ、私はそれを覆い隠している声を見抜き、問い直さなければならぬことを学びました。それは真実ですか？あなたは本当にそう信じているんですか？本当にそう感じているんですか？少女たちとともにした初期の研究で、私はそう問いかけている自分に気づきました。すると、私は「実は」という言葉を聞くことになりました。実はこう感じています、本当はこう考えています、これが私の知っていることです、と語られるのです。

ここで再び、聴くことのオーダシティ〔飛び込んで聴くこと〕に話を戻します。それは、語られた言葉だけでなく、語られなかった言葉、つまり会話の下に流れている会話を聴くということであり、変容の可能性を抱えた仕方でも聴くということです。私はスパイク・リーの映画の一場面で、白人至上主義団体クー・クラックス・クランに白人を装って潜入捜査する黒人男性の主人公が、自分の隠れ蓑になる白人のユダヤ人刑事に、なあ、相棒、お前も一肌脱げよ、と言う場面が大好きです。そこで言われているのは、私たちはみんな同じ船に乗っているじゃないかということなのです。

私は〔この講演で〕私自身のことをいくらか話したいと思います。聴くことについて私が知るに至ったことのいくらかを語り、もしあなたが沈黙のなかへと退いてしまった声に耳をそばだてたいならどのように聴けばよいのかについて伝えようと思います。そして、思想・芸術部門(Arts and Philosophy)でちょうどこの賞を受け取ったいま、私はひとつの告白をしなければならないと感じています。私の学位は心理学であり、私の研究も心理学に属するのですが、実のところ私は、片足を芸術(arts)に、もう片足を哲学(philosophy)に置いてきたということです。私はちょうど『ソルスティス(Solstice)』という小説を書き終えたところで、来年の夏に出版される予定です。その物語は、結婚と家族をめぐるもので、三世代にわたり、三つの大陸を舞台にして展開します。〔主人公の〕イヴはダンサーであり振付師。夫のゲイブは、第二次世界大戦前夜に子どもたちを避難させたキンダートランスポート(Kindertransport)に送られた少年のひとりであり、現在は中東を取材するジャーナリストです。彼らの子どもたちが投げかける問い、すなわち、何が真実であり、何を信じられるのかを知るためにはどうすればよいのかという問いは、知ることをめぐる哲学的な問いであり、これらの問いは、私たちをエデンの園へと遡らせ、物議を醸すバレエの初演の夜へと導いていくのです。

アーティストの役割とは、答えを与えることなく、問いを発することであると述べたのは、あのロシアの作家チェーホフでした。私は『人間の声で』で、むしろ長年つきまとうてきた問いに対する答えを与えました。〔もうひとつの声として聴かれた〕その異なる声は、実のところ、ひとりの人間の声であり、家父長制の声から区別される声なのです。ジェンダー二元論とジェンダー階層が刻印されている証拠に、耳をしかとそばだててください。民主主義と正反対に、家父長制はジェンダーにもとづいて生きよ、と命令しているのですから。また、家父長制が威力をもち、強力なものとなっている現在、バックラッシュと巻き返しの時代において、その声はきっと手厳しいものとなるでしょう。つまり、この人間の声は、抵抗の声となり、ケアの倫理学は、解放の倫理学になります。ケアの倫理学とは、道徳的損傷を防ぐための指針であり、家父長制から民主主義を解き放つための道しるべでもあるのです。

私は『もうひとつの声で』からはじまった道の終着点に到達し、そこからいま、未知の場所へと足を踏み出しています。夏の終わりに、私の最新刊(『人間の声で』)を日本語に訳してくれていた翻訳者たちから二通目のメールが届き、そこに彼女たちが「多くの議論を重ねた結果」、必要なのは新しい単語であるという結論に至ったと書かれていたことに、大いに胸をうたれました。私が使用する英語の

「オーダシティ」に対応する日本語は存在せず、関係性を変容するためにあえて関係性を危険にさらすという勇気というニュアンスや複雑な含意をもつ言葉はないということです。そこで翻訳者たちが見出した解決策は、すでにある二つの日本語を組み合わせることでした。従順でないことを意味する不逞(futei)と、つつましくないことを意味する不遜(fuson)を合わせ、さらに、大胆さ(boldness)を意味する語を加えることで、「不逞不遜な大胆さ(insubordinate and unhumbled boldness)」という表現を作り出したのです。この語がもたらすのは、オーダシティ、すなわち、ケアの倫理学を従順さから、そして、「女らしいもの」と見なされるものから解き放つ大胆さであり、あるいは、カントの言うところの義務を超える功績、つまり、責務や必須ではないもの〔不完全義務〕とされることから、そして、語るべきことを語る妨げとなってきたつつましさを解放する大胆さなのです。

私が女性たちの声に耳を傾けはじめて最初に強く引っかかったことのひとつは、女性たちが「自己中心的(selfish)」という言葉を使って、自分たちがしたいと思うことすべてを表明していたことであり、それに対して、他の人が彼女たちにしてほしいことや、すべきだと考えることをすることが善きことであり、責任に適ったことだと見なしていたことです。道徳の名のもとで、女性たちは自らを「無私(selfless)」、つまり、他者に対しては応答するけれど、自分自身の声には応答しないようになっていたのです。中絶に思いをめぐらせている妊娠中の女性たちの研究でも、彼女たちが産みたいと思えば自己中心的とされ、中絶したいと思っても自己中心的とされていました。しかし、その当時の歴史的な瞬間に、私は女性たちが、無私の道徳に疑問を呈し、無私であることは声を放棄すること、つまり、まるで声をもたない者かのようにふるまうことであり、責任と関係性を忌避することだとして道徳的に問題があるものとみなしていることも耳にしました。ケアし、責任を引き受けるためには、その場に存在すること、そして、自分自身と他者との関係において注意深くあることが必要なのであり、ある女性の言葉を借りるのならば、できるかぎり目を覚ましていること、自分が歩いている場所をできるかぎり知ろうとすることが必要です。遠ざかるのではなく、一步踏み込むということなのです。

少女たちとともに研究するなかで露わになったのは、彼女たちが、声をとるか、関係性をとるかという逆説的な選択を強いられていることです。逆説というのは、声を出さなければ関係性を築くことはできず、また、「関係性」を維持するために、関係性をあきらめなければならないからです。私が耳にしたのは、少女たちがこの苦境を驚くほどはっきりと明確に語ることでした。すなわち、もし自分の感じていることや考えていることを言えば、そんな自分と誰もいっしょにいたいと思わなくなると言うのです。ある少女が言うように、「私の声はうるさすぎるんです」ということです。しかし、自分が感じていたり考えていたりすることを言わなければ、誰も自分といっしょにいないことになります。どちらにしても、彼女たちはひとりぼっちになってしまい、「関係性」を守るために関係性をあきらめてしまうのです。それは、少女たちが、女性たちの沈黙、あるいは、現状にただ身をまかせようとする女性たちの姿勢によって維持されている生の秩序〔＝家父長制〕に参入する通過儀礼の印となる犠牲でした。

ちょうど昨年、契約を破る(Breaking the Bargain)と名づけられた研究の一環として、私は高校2年生にインタビューしていました。ここでいう契約とは、家父長制が女性と結ぶ沈黙の契約のことです。彼女は名門女子校の生徒でした。「より強いコネ〔縁故〕を手に入れるために、自分を殺しているんです」と彼女が言ったとき、私は「分かっていることだけれども、質問していいかしら」とたずねると、彼女は私にこう言うのです。当面は「自分を脇に追いやっておく」ので「いいんです」。だって「闘うのに見合う価値がありませんから」こう彼女は釈明したのです。

しかし、関係性のための闘いは、奮闘する価値がある闘いです。それは愛のために不可欠であり、同時に民主主義にとっても不可欠なものです。ここで必要となるのが、オーダシティであり、より詳細に言えば、従順でも、つつましくもない大胆さ、すなわち不逞不遜な大胆さです。翻訳者たちは、つぎのようにまとめてくれました。引用します。「私たちが直面する関係性や社会における困難を乗り越えるためには、オーダシティのある愛とケアが不可欠であることを認識し、力強く感じました」と。

私の研究はより切れ味がよくなり、いまや、いくつもの問いを手にも、こうしたことに挑んでいくことができます。チェーホフの精神に則るならば、こう言えるのではないのでしょうか。つまり、もっとも深いところにある人間の真実を白日の下にさらすことができるのは、ただ芸術の力によってなのだ、と。なぜなら、私たちが陥っている拘束状態から抜け出し、乖離や、知らないことを突破するために

は、連想的な様式を駆使する必要があるからです。さもなければ、あまりに簡単に、私たちは時代遅れの考え方や語り方に絡め取られてしまいます。いま必要とされているのは、もうひとつの声であり、新しい言葉であり、まだ耳慣れない語り方なのです。私は聴くことのオーダシティから、つまり、飛び込んで聴くことからはじめ、そして、女性の沈黙に長きにわたり向き合ってきたことの力を理解できるようになったのです。

私自身の生い立ちについてお話しする、と予告していたのでお話しします。

私はニューヨーク市で生まれ育ちました。ユダヤ系の両親のもとに生まれた、強く望まれ、深く愛されたひとり娘です。祖父母は19世紀末にヨーロッパからアメリカ合衆国にわたった移民であり、20世紀にヨーロッパのユダヤ人に降りかかってきた運命を躲かわすことができたのです。〔それに対して〕両親にとっては、アメリカとはチャンスの国(the land of opportunity)であり、まさにアメリカン・ドリームを生きたのです。父は乳製品店の裏部屋で生まれ、奨学金で大学に進学し、弁護士になりました。母は生来のアーティスト気質で、大学に戻り、保育園の先生になる前は、文芸誌の仕事をしたり、インテリア・デザイナーとして働いていたりしました。

私は、母が英語だけでなくフランス語やドイツ語でも歌ってくれる環境で育ちました。学校ではフランス語とヘブライ語、そしてラテン語を学びました。ピアノを弾き、フーガの主題が多声的に進行し、対位法によって複数の声部が展開するさまを〔聴きわけて〕学びました。高校では合唱団やマドリガルのグループで歌いました。大学の教養教育では文学を研究しましたが、当時はニュー・クリティシズムの時代であり、それ自体として自律したことばをもつテキストをめぐる、いかにその響きを分析し、どのように物語が構造化されているのかを問い、メタファーやシンボルに注意を払い、繰り返される単語や沈黙に気づき、どの視点から読むのか、語り手のポジションが信頼できるかどうかを問うことを学びました。こうしたすべてのことをここで述べるのには理由があります。というのも、私が自分自身の研究に取り組みはじめたのは、大学院を修了し、博士号を取得し、結婚し、三人の子どもの母となり、公民権運動で有権者登録をし、ベトナム戦争に反対するデモに参加し、大気圏内核実験の停止運動に関わったあとであり、そのころの私は、エリック・エリクソンやローレンス・コールバーグの仕事に触発されながらも自分自身は特別な野心をもたずにハーバード大学にて非常勤講師として教えていて、そして、そのころ、夫は医科大学を修了し、家計を支えられる状況になっていました。つまり、私は自分の関心あることをある程度自由に組み立てる余地を得たその時期に、人は自分自身についてどう考えるのか、そして、人生のなかで道が分かれ、どちらへ進むかを選ばなければならない局面において、道徳がどのように関わってくるのかについて強い好奇心を抱いていました。これらはまさに私自身が奮闘していた問いだったのです。

私はこのような状況にある人びと、つまり、人生の岐路に立っている人びとにインタビューをはじめ、そして、みなさんが知っているように、たまたま女性たちをインタビューすることになり、自分にはできると知っていることをしました。すなわち、異なる複数の声を聴き、それらをあれやこれやといった心理学理論に当てはめるのではなく、人びとがその人の正しさと言葉のままに語る、その響きに耳を澄ませたのです。

もしあなたは誰なのか、と問われるとしたら、私は、聴くということを実行するひとりの女である、と答えるでしょう。いまでも、選べるなら、話すよりも聴くほうを選びます。聴くことによって私は自分の位置を知り、いまどこにいて何が起きているのかを理解します。ある時期の教育のなかで、心理学や道徳に関する学びに耳を傾け続けていると、自分自身に耳を澄ませることが難しくなっていくのに気づきました。そして、自分の経験を信じることも難しくなっていたのです。

もしあなたは誰ですかと問われたとしたら、私はたまたま心理学の領域に迷い込んだ、〔人の声を〕聴く小説家であり、そしてある時点で、耳にしたことを書くようになりました、と答えることもできます。私は自分の研究が経験に根ざした実証的土台を持っていることをとても大切に思っています。たとえば少女たちに耳を傾ければ、私が耳にしたものをあなたも耳にすることができます。そして、いつも学生たちに言うのですが、心理学にとって、世界は、一日中、そして、毎日、開かれています。そして、心(psyche: 精神)は目に見えないけれど、耳にすることはできます。心理学にかかわる疑問や問いを抱いたときに重要なのは、どう聴くかを学ぶことであり、心(精神)の連想的な論理、すなわち、あれかこれかの〔心理学の質的分類〕カテゴリー分けに抵抗し、あれもこれもを受け入れる論理に耳を澄ませる方法を身につけることにあります。そして、私たちの内側と周辺に響く、声のポ

リフォニーを聴き、そのインタープレイや対位法を追跡する術を学ぶことです。さらに、もし発見することを目指すなら、すでに知っていることではなく、自分の知らないこと、自分を驚かせるものに注意をいかに払うかが大切になります。

「このみんなは本当に親切です」エラはそう言います。彼女は14歳で、新しい学校の9年生〔日本の教育制度でいうと高校1年生〕です。家族といっしょにアメリカを横断して引っ越し、新しい学校での生活をはじめています。新しい友だちを作る必要があるのです。エラは現在進行中の少女たちの研究である「ラディカル・リスニング・プロジェクト(the Radical Listening Project)」に部分的に参加しており、そして、新しい学校での生活や友人作りの難しさについて語るなかで、「このみんなは本当に親切です」と言います。さて、あなたなら何と言いますか？

インタビュアーは、女性なのですが、こう言いました、「みんな？」。

あなたはこのやり取りをどのように聞きますか？あなたなら何と言ったでしょうか？

エラは「ええと、実は、それは嘘なんです。なんでそんなこと言ったのか自分でも分かりません」と応じましたが、それはつまり、どうしてこのみんなは本当に親切と言ったのかを自分に問うているわけです。エラには、それが真実でないことは分かっていたのです。

では、いま、あなたなら何と言いますか？

インタビュアーは好奇心を示します。「どうしてそう言ったと思いますか？」と尋ねました。

エラは言います。「[私がほんとうのことを口にすれば]自分たちが非難されていると感じる人たちがいるから」と。

実のところ、エラはどうして嘘だと分かっていることを言ったのかを知っているのです。非難する、される、ということがあるから、そう言ったのです。エラは、少女たちが親切であるか否かによって非難されることを知っているのです。もしインタビュアーが何も言わなかったならば、彼女はエラが知っているそのことを、知ることはできなかったのです。

[いま]私は聴くことについて講義していますし、それをぜひ続けたいと思っています。

ですが、ここで、私の小説からある場面を取り上げて、みなさんの前で読みたいと思います。エデンの園の物語が入り込んでくる場面で、イヴという名前の人物が登場しますが、通例、登場人物というのは名前をもって描かれているものなので、いつか必ず、どうしてこの名前にしたのだろうかと自問することは避けられないだろうと思っていました。イヴ？なぜイヴなのか？と。そして、少なくとも西洋の伝統において、イヴが知恵の木の実を食べるということは、原初的な不逞不遜な大胆さを示す行為です。

その場面は、二人の女性の会話からなっています。彼女たちが出会ったとき、二人は見知らぬ者同士でした。ダンサーのイヴは、その年、オランダのダンス・カンパニーのレジデンシーに参加するために、一年をアムステルダムで過ごしており、そのカンパニーのために振付作品を制作する予定にあります。問題となった日、イヴは自転車に乗って田園へ出かけ、「春を迎えた柳は黄色く色づいていて」、ある村に差ししかかったとき、小さなレストランが目に入り、自転車を降ります。店先にて手書きでスープ(soep：オランダ語でスープ)と書かれたメニューを見て、中へ入ることに決めます。サンネというオランダ人の女性が迎えてくれます。レストランはサンネと夫の店であり、夫が作るニンジンのスープが自慢料理でした。サンネはイヴを窓際の席へ案内します。

そして、ここからがその場面[の描写]です。

生ショウガがニンジンの甘さを引き締め、スープの温かさが体の内側へと広がっていきます。イヴは種のぎっしり詰まった黒パンをちぎり、この村のレストランの静けさへと心がずっと落ち着いていくのを感じました。

サンネは窓の札を回して閉店(gesloten：オランダ語で閉店)にし、店を閉めました。ランチタイムは終わり、彼女がイヴのコーヒーを運んできたときには、ほかの客たちはすでにいなくなっていました。

「少し座っていられる時間はありますか？」とイヴがたずねました。

サンネはキッチンのほうをちらりと見ました。「紅茶を持ってきます」。

戻ってきたサンネは、小さなケーキを一片持ってきました。

「娘の大好物のアップルケーキです」。そのケーキをイヴのソーサーの上にそっとのせました。「お子さんはいらっしゃるんですか？」

「息子が二人いて、それから娘が一人います。娘はいま、ケニアで平和部隊(Peace Corps)に入って

いるんです」。

「うちの娘も冒険好きなんです。娘はいまアイスランドに住んでいて、ポニーの調教をしているんですよ。夫は行ってほしくなかったみたいですけどね」。

「私たちの場合は逆でした。ソフィーを行かせたくなかったのは私のほうだったんです。ソフィーが行きたがったのは、ボーイフレンドが行くからであって、私はそのボーイフレンドが好きじゃなかったんです。ソフィーが冒険好きだなんて、これっぽっちも思っていなかったんですけど、いまにしてみれば、私のほうが間違っていたことが分かります。それか、アフリカに行ったことでソフィーが変わったのかもしれませんが。だっていまでは彼女はボーイフレンドと別れて、正真正銘の冒険に身を乗り出しているんですから」。

イヴは、自分でも驚くほど自由に、フェルメールの絵から抜け出したような、大きな腰回りと落ち着いた色の服をまとった、このオランダ人の女性に話していました。そのうちに、二人とも父を亡くしていることがわかりました。サンネの父は、その年のはじめ、冬のはじめに亡くなったと、サンネは言いました。イヴの父は昨年春に亡くなったとイヴは言いました。「大変な時期でした」。

サンネは視線を落とし、その目元には、イヴの喪失を暗黙のうちに受け止める陰りが見えました。イヴは背筋を伸ばし、身を乗り出しました。

「つまりね、私にとっては父を喪失したのがつらい時期だったんです。父は死にたがっていたので、私は父に生きていてほしいと願った自分を自己中心的だと感じました。それに結婚生活も、とても困難な時期でした」。

結婚生活の困難という話題が出たとき、サンネは、既婚女性ならではのため息まじりのあの眼差しを向けました。イヴの何もつけていない(指輪のない)手をちらりと見ました。

「結婚しているようには見えませんでした」。

「していません」イヴは言いました。「実際は、していますが…〔していないというのは、実際には私は…(真に結婚しているのだろうか)] (I mean actually I am…)」とイヴは口にしたまま、どのように言葉を終わらせればよいかわかりませんでした。「私は、ここに自分ひとりでいるんです」。

午後の太陽が二月の強烈な光を窓から斜めに差し込ませていました。室内は熱気を帯びていました。かすかに生姜の香りがただよっていました。

結婚について、いったい何を話すことに、イヴはためらいを覚えていたのでしょうか？母とはあれほど親しいのに、両親の結婚について、つまり、二人の人間が、それぞれの人生が絡み合ったり離れたりしながら、二人の人生が織りなす複雑な文様について、その表面を眺めるほかに、驚くほど何も知らないのだとイヴは思い知り、そして、もっと驚くべきことに、そのことについていままでも一度も尋ねたことがなかったのだと気づいたのです。イヴはサンネの夫に思いをめぐらせました。ニンジンの皮をむき、生姜の香りにひらめきを得る夫。ほら、味見して、とスプーンを差し出す夫。夫に答え、ええ、すごくおいしいというサンネ。あるいは、おそらくそれはサンネが言ったことではなかったのかもしれませんが。夫は少ししゅんとしながら、生姜をもう少し足したり、サンネの言ったとおりにスープに何かを足したりします。そしてあとになって、客がスープをほめたとき、それはサンネのひらめきなんですと、夫は言うのでしょうか？

〔ジャーナリストである夫の〕ゲイブといるとき、イヴは彼の作品を惜しみなく称賛しました。それは、ゲイブの文章に対してイヴが感じていたことでした。他方でゲイブは、イヴが見落としていたものを指摘し、考えてみてもよいかもしれないと言いました。あるいは、ゲイブはイヴに、イヴは人びとが自分の言っていることを知っているか決めてかかっているけれど、実は、多くの人は知らないかもしれないし、そのダンス(作品)が何についてのものなのか言い表せないといったことを言うのでした。私たちはみな同じ感情を持っていると考えたときイヴは言いました。同じ感情、つまり、みんな愛されたいし、みんな死を恐れているということです。そして、自分の作品は、私たちに共通するその感情についてのものなのだと言いました。イヴは、夫と自分のあいだにある、この違いに気づいていましたが、だいたい物事はそういうものだと自分に言い聞かせていました。

サンネはイヴに父のことを語っていました。父は牧師で、戦争中、レジスタンス活動に関わっていました。当時、あらゆる人にとってオープンに語るのは極めて危険なことでしたが、とりわけ父にとってはそうでしたので、彼は説教を通して会衆に語りかけ、誰からも異議を唱えられないよう聖書の一節を選んで話したのです。

そのころサンネは十代(ティーンエージャー)でした。サンネは戦争末期の、ある日曜日のことを覚えています。「町の周辺では、レジスタンス活動が活発に行われていました。RAF、すなわち、イギリス空軍(Royal Air Force)の英国人パイロットが撃ち落とされましたが、レジスタンスのメンバーがドイツ軍より先に彼を助け出しました。その人たちは、パイロットのために偽の書類を用意するあいだ匿おうと、彼を私たちの家へ連れてきたんです。母はとても張りつめていました。父に目立つことは絶対にしてはいけませんと言いました。その日曜日の礼拝の朗読箇所は『創世記』で、アダムとイヴとエデンの園の物語でした」。

サンネの英語は流暢でほとんどよどみがなかったけれど、アダムをアダムのように第二音節にアクセントを置いて発音し、女性のことは e を a のように発音することでアヴァと呼んでいたもので、最初イヴには、サンネが誰について話しているのかわかりませんでした。しかし、サンネが木のことを語りはじめたときに合点がいました。善悪の知恵の木です。それがその日の説教の主題だったのです。

サンネはコップを持ち上げ、ひと口飲むように見えたのですが、そのままコップを置き、声を落としました。

「その日のことはいまでもはっきり覚えています。父は会衆に問いかけて説教をはじめました。『なぜあの木はその園にあるのでしょうか?』と。その木が園に、自然のただ中にあるのは、善と悪を知ることが私たちの本性(nature)だからです、と父は言いました。父は善良なオランダ人たちに、彼らが必要としている知恵は自分たちの手に届くところにあるのです、と語っていました。自分たちが何をなすべきかを誰かに上から命じられる必要などないのです。当時、ここオランダの状況は絶望的で、人びとは神に見捨てられたと感じていました」。

イヴはびっくりしました。そんな質問をするなんて考えたことはありませんでした。ある意味では自明なことなのに、衝撃のように響きました。なぜあの木はその園にあるのでしょうか?もし善悪の知恵が自然のうちにあるのなら、私たちは高みにいる神から何をすべきかを告げられる必要はありません。高みにいる神も、宇宙の王も、万軍の主も必要ないのです。イヴには、塔が崩れ落ち、要塞が崩壊する光景が浮かび、そして、その瞬間、彼女は自分の作品のかたちを垣間見ました。

彼女の口から言葉がこぼれ出しました。

「夫のもとを去りたいです」。

イヴは自分が言ったこと、そして、それを見知らぬ相手に向かって言ってしまったことに困惑しました。イヴは口を開いたとき、自分が何を言うのか分かっていませんでした。夫が夫のもとを去ったということもできたのです。それも文字通り事実でした。けれども、サンネの話を聴いているうちに、イヴのなかに突き動かされるようなひらめきが湧き上がり、突如、自分の作品がどこへ向かうことができるのかが見えたのです。しかし、そこへ行くためには、自分自身の知覚を信じ、ゲイブとその問いかけに気を取られずにいなければならなかったのです。

サンネは目をぱちぱちさせ、それから息を吸い込みました。サンネの青い瞳は、先ほどよりもいっそう強い色を帯びたように見えました。サンネは指で口元を覆いましたが、それはイヴには、ほほえみの兆しのようなものがわずかに浮かんたのを見えないようにしているように思われました。おそらく、夫のもとを去りたいという衝動は、彼女自身も共有しているものかもしれませんが、しかし、ちょうどそのとき、男性の声が「サンネ?」と呼び、サンネが椅子から立ち上がったため、イヴには知りようがありませんでした。キッチンのほうから、炒められた玉ねぎの甘く刺激的な匂いが漂ってきました。「ごめんなさい」とサンネは言いました。「夕食の支度を手伝わないと」。

サンネはイヴの肩にそっと手を置いて言いました。「もっと話したかったです」。

「ひとつだけ質問していいですか」イヴはたずねました。「あの空軍の一等兵(パイロット)はどうなったんですか?」

「ああ」とサンネは言い、彼女の瞳にはほのかな憂いが宿りました。

運河の水面を光がかすめていきました。太陽はすでに赤道を越え、いまや昼は伸び、広がり、そしてさらなる先へと到達していました。……彼女のころは、ふたたびあの説教へと巻き戻されました。牧師が語った、あの木の物語へ。

イヴは自転車の上で体を起こし、全体重をペダルにかけました。地平線の向こうでは太陽が赤く染まっていました。半分閉じたまぶたの向こうで、夕焼けの赤を背景に、イヴには自分のダンサーたち

が振り付けのシークエンスを形づくっていく姿が見えました。あの木の場面、そしてその直後、物語の中のイヴが実に手を伸ばす場面です。突如、イヴはペダルを止めました。自転車はよろめきました。あの聖書の物語を、もう一度読み返さなければなりませんでした。部屋の棚には、『欽定訳聖書』(King James Bible：イングランド王ジェームズ 1 世の命によって英訳された聖書)がありました。イヴはハンドルを握り直し、再び勢いよくペダルを踏み込みました。

自室に戻ったイヴは、(聖書のなかの)該当のページを見つけました。目が文字の上を駆け抜け、それからもとの場所に戻って、ゆっくりと噛みしめるように読み返しました。そこにはこう書いてありました。「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた」。(創世記 3 章 6 節)

女は蛇に欺かれたわけではなかったのです。何が語られていようとも、その物語は明白でした。女はその木を見つめ、自分の見たことにもとづいて行動していたのです。さらに彼女が信じがたいと感じたのは、女が知恵の木の実を食べたとき、何も起こらなかったということでした。女は死なず、裸体を隠そうともしませんでした。その代わりに、彼女はただ、そばにいた夫にその実を分け与えたのです。

イヴはもう一度その物語を読み、今度は動きのシークエンスを追いました。女は見た……女は取った……女は食べた……女は与えた、というシークエンスです。アダムが食べた後になってはじめて、恥じることと責め合うことがはじまるのです。隠すということもそれに続いてはじめて生まれます。アダムは女を責め、女は蛇を責め、そして、二人は自らの裸を覆い、神から自分自身を隠しました。

イヴの言葉がよみがえります。「夫のもとを去りたいです」。

木々の枝が光を抱いていました。

イヴは苦しみのうちに労働することも、苦しみのうちに子を産むこともなく、自分の欲望を夫の欲望に縛りつけることもなく、彼に思いのままにされることもないでしょう。自分を見捨てる者のそばには留まりませんし、自分の足が動きはじめ、どう進めばいいのかを見いだしはじめるにつれて、歩みのステップが、いまイヴの目に見えてきたものに应じて広がっていきました。そして突然、幻を見るかのように、イヴはこの挑戦によって力を得る自分を発見したのです。すなわち、イヴはダンサーたちとともに、この感覚を、つまり、隠すという行為がいつはじまったのかという、真実を悟った感覚を、探求しようとしていたのです。

私はこの小説を『ソルスティス(Solstice)』と名づけました。物語は1969年、反戦運動が頂点にあった時代にはじまり、冬至——一年で最も夜が長い日——から夏至——一年で最も光〔＝日の出から日の入り〕が長い日——へと、光の移ろいを追って進んでいきます。実のところ、イヴは夫のもとを去りません。しかし、結婚は変容します。責めることや後悔することに代わるものとは何かという問いは、結婚の文脈のなかだけでなく、エデンの園の物語や、中東の紛争によっても提起されます。おそらくそれは、少なくとも合衆国に生きる私たちにとっては、時勢に適した問いなのです。

そして、光が移ろい、この時代の思いがけない失望のただなかで、稲盛財団による京都賞の思想・芸術部門をケアの倫理に授与するという選択は、これまで少なくともこの文脈においては聴かれてこなかった、真剣に受け止められてこなかった、女性や少女たちの声によってもたらされた貢献を、明るく照らし出しているのです。

私は、この評価に、この栄誉に、そして、この物惜しみしない贈り物に、深く感動しています。私はこの賞を、精神(spirit)において、すべての女性と少女たちと分かち合いたいです。私はいまでもよく覚えています。真冬の午後。1975年のことでした。三人のわが子たちが学校へ行き、夫は仕事に出ていて、犬はきっと私の足元で眠っていました。そして、私はタイプライターに黄色い紙を一枚差し込み、こう打ち込んだのでした。「もうひとつの声で(In a Different Voice)」と。それは、私がはじめて学校のためではなく、はじめて自分のためだけに書いた文章でした。私はつぎのように語りかけてくる、内なる声に応答していたのです。私が本当に考えていることを知りたいのなら……という内なる声に。

拙著『人間の声で』において、私ははじめて京都を訪れたときのことを書いています。当時、東京駅で迷わないようにと、ある大学院生が親切にも私といっしょに東京行きの電車に乗ってくれました。彼女は声について、そして、声を失うことについて、私にたずねてきました。私が、声を失う人なん

ていないと言うと、彼女の顔がぱっと明るくなりました。その言葉を書いてくれませんか？と彼女はたずね、ノートを差し出してきました。私はその白いページに言葉を刻みながら「声を失う人はいない」ともう一度言いました。人は自らの声を沈黙させることはあります。しかし、それには必ず理由があるのです、と私は言いました。

そのうえ、今日の世界においては、ケアの倫理学の声を沈黙させてはならない強い理由があり、そのことが、私を新しい言葉へと立ち返らせるのです。というのも、日々のケアワークを担っているのは、依然としてほとんどが、典型的に従順とみなされがちな人びとであり、つつましくあることが期待されている人びとであるからです。この状況を変え、その声を前面に押し出すためには、不逞不遜な大胆さこそが必要なのかもしれません。

京都賞の思想・芸術部門 (Arts and Philosophy)、思想と道徳における賞を、この歴史的な瞬間に、女性や少女の声を聴くことから始まった仕事に授与した稲盛財団の選択に、私は深く感動しています。この決断は、そのオーダシティにおいても、そのわかりやすさにおいても、息をのむものです。

思い返してみると、日本の翻訳者たちが見抜いたように、私の聴くことをめぐるオーダシティ〔すなわち、不逞不遜な大胆さ、飛び込んで聴くという営み〕は、確立された語り方に挑戦するという点にあったのだと分かります。そして、おそらくそれ以上に、人間が互いにどのようにともに生きるかという関係性のあり方を変容させるために、既存の関係性のあり方を危うくすることを引き受けようとした、私の勇気にこそあったのです。

このようなご評価を賜りましたことに、心よりお礼申し上げます。

(訳：小西真理子)

講演後に行われたインタビュー動画を京都賞YouTubeチャンネルでご覧いただけます。

(<https://www.youtube.com/watch?v=LCypR-Too50>)